
メダロット+

メダロッター R y u

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メダロット+

【Nコード】

N5842Y

【作者名】

メダロットARYU

【あらすじ】

メダロットより約三年・・・、

これは一人の少年とメダロットの出会いから始まり数々の仲間、ライバル、そして「トモダチ」との出会い、戦いを繰り広げる少年少女、メダロットたちの物語・・・。

そして未来の少年たちへつなぐ物語でもある・・・。

Memory Disc 0 プロローグ（前書き）

初めまして、Ryuです。

初めて書く小説ですが、それでも読んでくれると言う人は読んでください。

では始めます、メダロット+の世界をお楽しみください。
では。

Memory Disc 0 プロローグ

時は近未来……

世間では「メダロット」同士を戦わせる「ロボット」という遊びが大流行していた。

ある年、「魔の十日間」と呼ばれる事件が起きた。

しかしその事件は一人の少年とメダロットによって終演を迎えた……

それから約三年、一人の少年と一人のメダロットの出会いから新たな物語が始まる……

「……カ……ル」

「……うーん」

「ヒ……ル！」

「……」

「ヒカルってば！」

「……！」

僕は誰かに呼ばれ目を覚ました。

「・・・なんだ、キララか、おどかすなよ・・・。」

「おどかすなよ、じゃないわよ、小學校生活最後の夏休みが始まるって言うのに居眠りしてるなんて信じられないわ。」

起きた途端にここまで言われるとは・・・反論出来ないからしょうがないが。

「まあいいわ、・・・所でヒカル、あんたこのクラスの友達の事覚えたの？」

「・・・三年の頃から一緒の人達しか・・・。」

「あんた・・・。」

僕の言葉にキララは怒った表情を見せたが、すぐに呆れた表情で僕を見た。

「・・・じゃあ、せめてこのクラスで注目されている子ぐらい覚えておきなさい、いいわね、よく聞きなさい。」

キララがそう言ったので僕は話を聞くことにした。

「まず名前は「獅童 かい」、成績優秀で学年でもトップの学力ね、それで運動神経も抜群、これだけ聞けば完璧な人物だけど・・・。」

「致命的に口が悪い、のよね。」

キララが話していると、一人の女の子が話の間に入ってきた。

「イセキ！」

「で、なんであんだ達あいつの話をしているの？」

「ヒカルがこのクラスの人のこと全然知らないって言うから離した所なのよ。」

「ふうん、じゃあ続きはあたしが話すわ。」

するとイセキがキララに代わって話を初めた。

「さつきも言っただけであいつは口が悪いからね、まともに話もできないから友達ができないの、目付きも悪いからみんな恐がって近寄らないしね・・・、話相手と言えばあたしぐらいなもんよ。」

「・・・へえ、わかったけど、なんでイセキがそんなこと知ってるんだ？」

「まあ、何て言うかあいつとは幼馴染みってやつだからね、大体のことは知ってるわね・・・。」

「そうなんだ・・・、でも珍しいなイセキから話しかけてくるなんて。」

「たまにはいいじゃないの。」

俺がそう言つとイセキは軽くながして話を続けた。

「まあ、そう言う性格のせいで友達ができないから強がっててさ、あれであいつさみしがり屋なのよね・・・。」

「おい。」

side - かい

イセキのやつが何か話してやがる・・・、ちつ、どうせまた有ること無いこと吹き込んでやがるな・・・

「おい。」

「へっ？」

「てめえまた有ること無いこと吹き込んでやがったな・・・」

「そ、そんなわけないでしょ、あたしがあんたの事を面白おかしく話して何の特になるって言うの？」

「てめえは昔から事ある事にオレの事を変な風に他人に話してやがるだろうが!!」

「（あー、やっぱこいつめんどくさいわ・・・）」

「二人とも仲がいいわね。」

「「よくない!!!!」」

オレがキララとか言うやつに反論するとイセキのやつも同時に言葉を發した。

「真似すんな!」

「あんだこそ！」

「あつ、あのさ！」

オレたちが言い合いを始めるとヒカルってやつが話しかけてきた。
一体何のつもりだ・・・？

「かいくんってどんなメダロットをもってるの？」

「・・・ああ？」

「・・・どんなメダロットもってるのかなーって。」

「・・・・・・」

ちっ、めんどくせえ、オレはメダロットもってねえんだよな・・・。

「こいつメダロットもって無いのよ。」

するとイセキのやつがオレがメダロットをもっていないことを言った。
・・・余計な事を言いやがって、くそっ！

「・・・メダロットなんてどこが面白いんだ・・・！」

そう言ってオレは自分の席に戻った・・・。

「オレ、なんか悪い事を聞いちゃったかな・・・。」

「ああ、気にしないでいいわ、すねただけだから。」

「うん・・・。」

（しょうがないわね・・・）

放課後・夜

かいの家

「メダロットか・・・」

（あいつ元気かな・・・）

・

・

・

・

「こっちだよ、

――！」

『待つて下さい　どの、そんなに走ると危ないですよ!』

「わるいわるい、でもボクたまにしか　とおじいちゃんのことにあそびにいけないからうれしくてさ。」

『大丈夫ですよ、時間はたっぷりありますから。』

「うん!」

「・・・いつの間にか寝ちまつたのか、もう朝か・・・。」

「かい~~~~!」

すると下から母さんの声がした。

「イセキちゃんがきてるわよ~~~~!」

イセキが・・・?、あいつ夏休み初日から何のようだ・・・?

「か~~~~!はやくおりてこないとかあさんないちゃうぞ~~~~!」

「今いくよ!」

母さんに泣かれるのは面倒だ、・・・しょうがない、行こう。

オレは階段を下りて玄関に向かった。

「・・・何だよ。」

「さあ、出かけるわよ!」

「は?」

いきなり何言っただ、こいつ。

「メダロット研究所に行くのよ、はやくしなさい!」

「・・・なんでだよ、オレ別にメダロット興味ないし・・・。」

「今はそうかも知れないけど見学に行けば興味がわくかもしれないでしょ、それにこんな「可愛い女の子」からの誘いを断るって言うの?」

「そうよ、かあさんもそうおもってる。」

「・・・自分で可愛いって言ってる時点で可愛くねえよ。」

「なんか言っただかダメエ。」

「・・・いや何も言ってねえ。」

「そう、なら早く行きましょう。」

「・・・」

オレは半ば強引に研究所につれて行かれた。

メダロット研究所

「へえ、結構立派なんだな。」

メダロット研究所はオレが思っていたよりも立派だった。

「でも、入れるのか？」

「大丈夫よ、見学だけならタダだから。」

「そうか……」

そして俺たちは研究所の中に入った。

「まずは……展示されてるメダロットを見ましよう。」

「ああ……。」

オレは言われるがままにメダロットを見に行った。

「……」

俺が思っていたよりもメダロットの種類はすごかった。

「どう、すごいでしょ、でもまだこれで全部じゃ無いのよ。」

「そうなのか!？」

「ええ、今のところ七十体以上もの機体が出てるわ。」

「へえ、七十体が、すげえな……。」

「しばらく見ていたら?、ちょっとある人に話つけてくるから。」

「ああ。」

そう言うといセキはどこかへ行ってしまった。

言う通りしばらく眺めてるか……。

「DOG型シアンドッグ、こいつは射撃が得意なのか、CAT型マゼンタキャット、たしかイセキが持っていたやつか、DGU型ドンドグーか、変な顔だな……。」

いまいち興味をそられるメダロットは見当たらなかった。

「……うん?こいつは」

そんな時ふとオレの目にうつったのは……

「KWG型……ヘッドシザース……。」

オレの興味はそのメダロットに向いた、が、その時……。

「かい!」

「うわ!？」

「博士に会いに行くわよ!」

「……いきなり声をかけんなよ、びっくりするだろうが……。」

「ボーっとしてるあんたが悪いんでしょ。」

これ以上なんか言つと言い合いになりそうだ、黙ってた方が良さそうだ。

「……。」

「……何黙ってんのよ、気持ち悪いわね、行くわよ。」

そしてオレたちは博士のところに向かった。

「博士、連れて来ました!」

「おお、イセキ君、彼が獅童かい君か。」

そこにいたのは白衣とサングラスのじいさんだった。

「あんたがメダロット博士……。」

「うむ、わしがアキハバラ アトム、メダロット博士じゃ。」

「どうも……。」

「・・・ところでキミはメダロットに興味があるかね？」

博士は突然オレにそんな質問を投げかけてきた。

「・・・・・・・・はい！」

「うむ、いい目じゃ、わしがメダロットについて教えてやろう、と言いたいところじゃが・・・生憎忙しくて、代わりに行っては何じゃがこれをやろう。」

博士から渡されたのは名札だった。

「これは・・・？」

「入ってすぐ横に扉があつたじゃろ、そこにはわしの孫のナエがいるんじゃが、やつはわしの次にメダロットに詳しいと行っても良いじゃろう。」

「つまりこれがあれば部屋に？」

「うむ、それじゃあ楽しんで来るが良い。」

「ありがとうございます！」

オレとイセキは博士の孫のところへ向かった。

ウィーン・・・

「失礼します・・・。」

部屋に入ると長い黒髪の女の子がいた。

「あら・・・?」

「久しぶりね、ナエちゃん。」

「イセキさん・・・どうもお久しぶりです!」

どうやら二人は知り合いみたいだ。

「実はこいつあたしの幼馴染みなんだけどメダロットのことを教えてやって欲しいの。」

「はい、わかりました、えっと・・・」

「獅童かい、かいでいいよ・・・。」

「はい、よろしくお願いします。」

・・・可愛いな、イセキとは大違いだ。

ガッ!

「っ!?!」

いきなりオレの足に激痛が走った。

「・・・なんかあんたいつもと態度違うくない?」

「このやろ・・・」

「……………」

「……な、何？」

気が付くとナエちゃんが俺たちのことをじっと見つめていた。

「お二人とも、仲がよろしいんですね。」

「断じて良くない!!」「」

「ふふ、それではメダロットについてでしたね、始めますけどいいですか？」

「待つて、メダルとは何かってところから話してやって。」

「は、はい。」

そしてナエちゃんの説明が始まり、オレはしばらく真面目に聞いた。

「と言う事です、わかりましたか？」

「ああ、ちゃんと聞いていたから大丈夫だよ。」

「そうですか、よかったです……。」

「じゃ、そろそろ帰りましょうか。」

突然イセキがそう言った。

「もうそんな時間か？」

「もうお昼だし、帰った方がいいでしょ。」

「それもそうか・・・（また来ればいいしな・・・）。」

ドオオーーッ！

「な、なんだ！？」

「博士のいた部屋の方からよ！」

「おじいさまの！？」

突然ナエちゃんが走り出したが、それをイセキが引き止めた。

「待ちなさい、一人じゃ危険よ、あたしも行くわ。」

「は、はい、わかりました！」

俺たちは一旦部屋から出た。

一体何が起きているんだ・・・？

しばらく走っているとオレたちとはんでもない光景を目にした・・・。

「メダロットたちが、研究所を破壊している！？」

「これは急いだ方が良さそうね・・・、かい！あんたは部屋に戻ってなさい。」

「な、なんだと・・・！」

イセキの突然の言葉にオレは頭に来てしまった。

「ふざけんな！なんでオレだけ逃げなきゃなんねんだ！？」

「あんた、メダロット持っていないでしょ？」

「っ・・・！」

悔しかったがオレは何も言い返せなかった。
紛れもない事実だからだ・・・。

「・・・」

ダッ！

「・・・ごめんね、かい。」

しかしその時オレは知るよしもなかった・・・、この後オレにとつて運命を変える出会い、いや再会があることを・・・。

M
e
m
o
r
y

D
i
s
c

1
に
続
く
・
・
・
・

Memory Disc 0 プロローグ（後書き）

お楽しみ頂けたでしょうか？

次回から本格的に始まります。

興味を持って頂けた方はどうか

かいたちの事を見守ってやってく

ださい！

ではまた！

（ノシ）

Memory Disc 1

新生コンピュータ誕生！かいとロクシヨウ（前書き）

今回はロボットがあります。
楽しんでください！

修正しました！

これで読みやすくなったかと。

Memory Disc 1 新生コンピ誕生！かいとロクショウ

オレはイセキに言われた通りに部屋に向かって走り出した……。

くそっ！、オレにもメダロットさえあれば……。

オレの中でそんな感情が渦巻いた。

「……戻ってきたけれど……。」

もちろんやることなど何もない、オレはここで指をくわえて見ている事しか出来ないのだ……。

『まだ、こんな所にも人間がいたか。』

「っ！？」

『安心しろ、苦しみは一瞬で済ませてやる。』

突然声がして振り向くとそこにはKTN・OX、ア・ブラーゲのパーツをつけたメダロットがいた。

あ、あいつまさかオレを殺そうとしてんのか……？

い、いや大丈夫だ、メダロットは三原則がある、人間を傷つける事は……

オレがそう思った瞬間だった。

ザシュッ！

「――っ！？、うわあ――！！！」

オレの腕には二本の切り傷が残っていた。

『まさか三原則があるから攻撃出来ないとも思ったのか？、生憎俺はそんなくだらないモノからは解放されている……！』

や、ヤバイ……、想像していたよりも相当ヤバイ……、オレは死ぬのか……？、嫌だオレはまだ死にたくない……！！

『……われらの理想のために死ね。』

誰か、助けてくれ……！

ガキインツ！！

……あれ？、攻撃が止まった……？

オレが目を開くとそこには白いクワガタムシのメダロットがいた。

『ぬう……！？』

『……大丈夫でござるか？』

「……ああ。」

オレは突然の事に驚いて状況を把握できなかった。
しかしこれだけはわかっていた。

こいつはオレの味方だと……。

『拙者が奴を倒す、おぬしはそれまで動かない方がいい。』

そう言うത്そいつはキツネ型に向かって言った。

『ふはははは、久しぶりに楽しめそうだ！』

『斬り捨て御免！』

キイーン！

二人の剣がぶつかりあい火花を散らす。

メダロツチが無いので正確にはわからないがまだ二人ともまだダメージは無いだろう。

『ふん見かけだけのクワガタでは無いようだな。』

『貴様こそ。』

二人の戦いはすごいものだった。お互いに一步も引かない物凄い攻防だった。

「すげえ……。」

『ふ、クワガタムシ、オレの腕にばかり注意が向いてるんじゃないか？』

『なに？』

腕にばかり……？、あいつまさか！

「よける！ブレイク攻撃がくる！」

『・・・！』

『ミカツチー！』

ブウウン、ドオツ！

『はっ！』

ギリギリでクワガタはブレイクをかわした、よかった役に立てたみたいだ。

『・・・助かった、少年。』

「ああ・・・、ところで頼みがあるんだ。」

『なんでござるか？』

「一緒に戦わせてくれ。」

『・・・！、・・・解った共に戦おう。』

「ああ！」

オレはこのまま見ていただけなんて嫌だ、その気持ちがこの答えに導いた。

『指示は任せたでござる。』

「おう！」

『ふん、人間が着いた位で調子に乗るな！！』

『いくぞ！』

そう言うときワガタはキツネに向かって走りだした。

「チャバラソードで攻撃！」

『はあっ！』

キイイン！！

『むっ！？・・・でえええいつ！！』

「かわしてピコペコハンマーだ！」

『ふっ！、はあああっ！』

『ぬっ、ふんっ！』

「かわされたか！」

『な、なんだこいつらは・・・さっきよりも動きが数段良くなっている・・・！』

「・・・」

どう来る・・・？

『ぐっ、うおおー！！！！！！』

突っ込んできた・・・！

「・・・いいか、恐らくいまやつは冷静さを失っている、だからやつの突っ込んできた勢いを利用して・・・。」

『・・・解ったでござる！』

・・・まだ、・・・まだだ、・・・、
「『いまだ！！！！』」

ズバアッ！！

あいつは突っ込んできたキツネをチャバラソードで返り討ちにした・
・・・！

『ぐっ、バカなっ・・・、この俺がこれ程のダメージを・・・！？』

『・・・』

「やった・・・！」

キツネは胸部に大きな傷がついていた、もう勝負はついたような物だろう。

『少年・・・。』

「ああ・・・。」

クワガタはオレに視線を向け何か同意を得るような顔をした。
オレは何を言おうとしたのか大体わかったのでそのまま返事をした。

『拙者は争いは好まぬ、このまま引き上げるがいい。』

『ぐっ 貴様ら名は・・・？』

『・・・ロクシヨウだ。』

「獅童かいだ・・・！」

『貴様は・・・？』

『狐王丸だ、ロクシヨウに獅童かい、覚えたぞ！、次に会う時はこ
う上手くはいかんぞ覚悟しろ！』

そう言つと狐王丸と名乗つたメダロットは凄いスピードで去つて行
つた。

「・・・・・・はあ。」

長い緊張から解放されオレは安堵の溜め息をついた。

すると部屋に突然イセキたちが入ってきた。

「かい！」

「うおっ！？」

イセキがいきなりオレの肩をつかみ安否を確認してきた。

「大丈夫！？、さっきあなたの叫び声が聞こえて、ケガとかは！？」

「大丈夫だよ・・・。」

「って、どこが大丈夫なのよ！、腕ケガしてるじゃない！」

「だからこれくらい大丈夫だって・・・。」

「そんなわけないでしょ！、早く手当てしないと！」

「帰って自分でするからいいって、少し切られた位だし・・・。」

「なによ！、あんたあたしがどれだけ心配したと思ってるの！？」

「まあそれくらいにしてやりなさい、特に大きなケガでは無いのじやから。」

しばらくして博士が入って来てイセキを宥めた。

・・・助かったよ博士。

「どうやら間に合ったようじゃな、ロクシヨウ。」

「えっ！？」

オレは博士が突然そう言った事に驚いた。
博士とロクシヨウは知り合いだったのだ。

『ええ、言われた通り彼を助ける事は出来ました、ですが・・・』

「ケガをさせてしまった事が・・・、かい君、君はどう思っておる？」

「え・・・、オレはむしろ感謝しているよ、ロクシヨウが来てくれなかったら死んでたかもしれないし・・・。」

「だそうじゃ、彼は気にしておらん、それどころか感謝しておるんじゃない、そう自分を責めるでない。」

『・・・わかりました。』

ロクシヨウがそう言うと、博士がオレに話しかけて来た。

「実はのかい君、ロクシヨウは三年前にある事件を解決するのに手を貸したのじゃが・・・、その事件が原因でメダロットは登録制となり、多くの野良メダロットたちが居場所を失った、無論ロクシヨウも例外ではなかった、彼はほんの数カ月で多くの物を失ったんじゃないよ・・・。」

「そうだったのか・・・。」

『・・・博士拙者はそろそろ。』

「うむ・・・。」

「待てよ！」

『！！？』

気が付くとオレはロクシヨウを呼び止めていた。

「なあロクシヨウ、おまえ行くあてはあんのかよ？」

『とくには……。』

「じゃあオレのところにこいよ。」

『！？』

オレの突然の言葉にロクシヨウは驚いた表情を見せた。

「（ほう……。この少年、ロクシヨウを誘うとは思いつた事をするわい。）」

『……。すまないがそれは出来ない。』

「どうしてだよ？」

『拙者にはやらねばならぬ事がある。』

ロクシヨウがそう言う博士が話に入ってきてロクシヨウにこう言った。

「まあ良いではないのかロクシヨウ、しばらくは休んでも、おぬしは良くやっとな、休暇をもらったと思つての。」

『……。解りました。』

そう言うロクシヨウはオレの方を向き手を差し出しこう言った。

『これから宜しく頼むかいどの。』

「・・・！、ああ！」

こうしてオレとロクシヨウ、新たなコンビが誕生したのであった。

??? side

『只今戻りました。』

「・・・」

『報告、メダロット研究所の襲撃失敗に終わりました・・・。』

「そう・・・。」

『申し訳有りません。』

「君ほどの実力があひながら失敗するなんて何があつたんだい？」

『実はある人間とメダロットに邪魔をされて・・・。』

「……へえ、君をそこまで追いこむほどのメダロットなのか。」

「いえ、それが……。」

「……?」

「そのメダロット、人間の指示を受けてから動きが突然良くなりまして。」

「……へえ、それでその二人の名前は?」

「えっ?」

「ちょっと興味が沸いたんだ、教えてよ。」

「は、はい、人間は獅童かい、メダロットはロクシヨウです。」

「ふふ、かにロクシヨウか……、狐王丸、もう下がっていいよ。」

「はっ!」

「それと、襲撃の軒だけど僕は怒っていないよ、襲撃の目的は僕たちの力を見せつける為だからね、それに僕はできる限りメダロットも人間も傷つけないからね……。」

「はっ!、有り難きお言葉!」

「これからメダロットと人間の真の理想郷をつくるため、宜しく

頼むよ。
」

『はっ！、それでは失礼します！』

ふふっ、かいにロクショウか・・・、面白そうだね・・・。

Memory Disc2へ続く・・・

Memory Disc 1 新生コンピ誕生！かいとロクシヨウ（後書き）

次回からは平和です。

フツーにメダロットという感じだと思います。

こんな小説でよければ次回も！

（ノシ

M e m o r y D i s c 2 強敵登場！その名は竜崎！（前書き）

今回はメダロットRでお馴染みのあのキャラも出てきます！

それではお楽しみください！

Memory Disc 2 強敵登場！その名は竜崎！

「……………と言つ訳で、今日から家で住むことになったんだけど。」

『よ、宜しく頼む』

「……………やっぱダメか？」

「おお…………、かい、お前もついにメダロットを始める気になったか！」

父さんは問題無いけど……………。

「……………そう、よろしくね、ロクシヨウちゃん。」

「じ、じゃあ、オレたちは出かけるから。」

「まで、かい！」

「な、なに？」

「彼のパーツだけじゃ組み換えができないだろ？これを持っていきなさい。」

そう言つて父さんは五千円をオレに渡した。

「あ、ありがとう、じゃ。」

そしてオレは急ぐように家を出た。

「やはり男の子はこうでなくちゃな。」

「……ええ。」

公園

『どうしたのでござるか、かいどの。』

「うん、いや……。」

『もしかして母上どのはメダロットのことが嫌いなのか？』

「いや、そうじゃないんだ、ただ母さんはメダロットの話を全然しないからさ……。」

『そうでござるか……。』

「……なあ、コンビニにっつぜ。」

『う、うむ。』

オレたちは話題をかせ、コンビニへと向かった。

コンビニ

「来たのはいいけど・・・。」

特に欲しいパーツとかないんだよな・・・。

「まあ、見るだけ見てみるか・・・。」

オレはしばらく棚に置いてあるパーツをながめていた。

「・・・なあロクシヨウ、これなんかどうだ？」

『・・・メガファント？』

なぜかロクシヨウの目が冷たくなった気がした。

「・・・どう思う？」

『なんとなくそれは嫌なのでござるが・・・。』

「別に全部つけなくてもいいんだぜ？」

『・・・左腕意外取り換えられそうでござる。』

「・・・わかった、そんなに嫌ならやめとくよ。」

・・・ロクシヨウはメガファントに嫌な思い出でもあるんだろうか？

特に買う物も無いのでオレたちはコンビニを出ることにした。

すると聞き覚えのある声がした。

「かいー！ー！！」

「何だよイセキ、そんなに慌てて？」

「あんた研究所を襲ったメダロット達を追い返したでしょ、その噂を聞きつけたあるメダロッターに目をつけられたの！」

「・・・それでそのメダロッターってのは？」

「竜崎 蓮次、通称恐竜使いの「REX」よ。」

「れ、REX・・・・・・で、誰だ？」

オレがそう言うといセキはずっこけた。

「・・・あんた本当になんも知らないのね。」

「・・・」

「竜崎はこの辺じゃ名の知れたメダロッターよ！」

「・・・あ、ああ。」

「それでもって竜崎のやつは三日後に対戦したいって言っていたわ。」

「三日後か、そうと決まれば特訓だな、行くぜ、ロクショウ！」

『うむ。』

「待つんだ、君たち！」

すると突然誰かから声をかけられた。

「君たち竜崎と戦うのだろうか、だったら僕に特訓をつけさせてくれないかい？」

「・・・誰だあんだ。」

「すまない、名乗るのが先だったね、僕は太村 鱒次九郎、ジックと呼んでくれ。」

「・・・で、何でそのジックさんがオレ達に特訓をつけてくれるんだ。」

「竜崎とは少しね・・・、それに今の君たちでは竜崎には勝てない、それだけじゃダメかい？」

「・・・竜崎はそんなに強いのか？」

「ああ、少なくとも今の君たちでは敵わないだろうね。」

「・・・あんに特訓をつけてもらえば勝てるってのか？」

「僕は力を与えるだけさ、勝てるかどうかは君たち次第だよ。」

「おもしれえ、だったらうけてやるぜ、あんたの特訓を！」

「そうでなくっちゃ面白くない、早速始めよう!」

「おう!」

「えっ、ちょ、ちょっと待ちなさいよ!」

こうしてオレとジックさんの特訓が始まった。

ジックさんの特訓はとても厳しいものだった、だけどオレたちは諦めずに最後までやりとげたんだ!

三日後

商店街

「・・・逃げずにやってきたみたいだな!」

「・・・イセキ、竜崎って高校生だったのか?」

「言ってなかったっけ。」

「聞いてねえよ!」

「別にロボトルの強さに年齢が関係する訳じゃないんだからいいじ

「やない！」

「おい、お喋りはそこまでにして、さっさと始めてくれないか？」
しばらくオレたちが話していると竜崎にそう言われた。

「お、おう！」

「この勝負、合意と見て宜しいですね？」

「おわ！何だこのオッサン！」

「ロボット協会公認レフェリーのMr.うるちだ、お前そんなことも知らんのか？」

「わ、悪いかよ？」

「別に構わんさ、俺が興味あるのはお前の実力だ。」

「・・・始めてくれ、うるちさん！」

「それでは、ロボットうー、ファイトおー！！！」

やつが出してきたメダロットは恐竜のようなメダロットだった。

「いけ、アタックティラノ！」

『グオオオツ！！』

アタックティラノはいきなりハンマーを降り下ろしてきた！

『くっ!』

ロクシヨウも何とか避けることはできたが・・・、あのハンマー凄い威力だ。

『グオアアアア!!!』

ブウンッ!

ブウンッ!

『くっ、当たったらひとたまりもないな・・・。』

「ふん、ちょこまかと、ティラノ!、ブレスファイヤーだ!」

『グオッ!』

ブオオッ!

『ぐあっ!』

「頭部に16ダメージ」

ティラノの頭部から吹き出した炎にロクシヨウが直撃してしまった・・・。

「大丈夫か、ロクシヨウ!」

『ああ、心配は要らぬ!』

少し見くびっていたかも知れないな・・・、ジックさんに聞いてい

たよりもずっと強い・・・。

「ふっ、少しは抵抗してくれよ、それともその武器は見せかけか？」

「くっ、オレたちを甘く見るなよ！、ロクシヨウ、チャンバラソードだ！」

『でえええい！！』

「迎え撃てティラノ！」

『グオツ！』

闇雲に突っ込んだって返り討ちにあっただけ、それぐらいわかっていたさ！

「ロクシヨウ、跳べ！」

『承知！』

「なに！？」

高く飛び上がるロクシヨウ、突然のことにティラノも反応できなかったようだ。

『くられ！』

ズバッ！

『グウ・・・！？』

「右腕に20のダメージ」

「よし、ロクシヨウ、畳み掛ける！、ピコペコハンマー！」

『うおおお！！』

「くっ、調子に乗るなよ、ガキが！ストライクヒット！」

『グオアアアア！！』

ズドオオン！

『！？』

「ロクシヨウ！？」

「左腕に40のダメージ、左腕パーツ、破損、脚部に10のダメージ」

「ふ、バカが、むやみやたらにがむしゃらの行動を使うからだ！」

「くっ、しまった・・・、うかつだった・・・！」

そうだ、がむしゃらの行動を行った後は大きく体制を崩してしまう・・・。

完全にオレが勝負を急いだせいだ。

『大丈夫だかいどの、拙者にはまだ自慢のチャンバラソードが残っている！』

そんなオレをロクシヨウは励ましてくれた。

・・・そうだよな、後悔するよりも勝つための作戦を考えなければ。

「ありがとう、ロクシヨウ、．．．オレに考えがあるんだ、乗ってくれるか？」

『無論！』

「今残っているパーツから導き出せる答えはこれしかない、アンテナで命中精度を上げて頭を一撃で破壊する．．．！」

『．．．承知した！』

辛うじて脚部は破壊されなかった、これなら攻撃をかわしつつ索敵行動を行える！

「ロクシヨウ、アンテナ！」

『おう！』

ブウン ブウン．．．

「．．．何を狙っている、．．．やれティラノ！ストライクヒットだ！」

『グオオオオ！』

ブオンツ！

『ふん！』

ブオンツ！

『はっ！』

「ちっ、ちょこまか逃げ回りやがって！」

『グオオオオオツ！！』

ブオンツ！

「いまだ！チャンバラソードだ！」

『うおおお！』

「な、何！」

ズバアツ！！

ロクショウの攻撃はティラノに命中した、だが・・・。

「脚部に55のダメージ、脚部パーツ、破損」

「ふっ、どうやら狙いがずれたようだな！、とどめだティラノ！！！」

『まだだ、拙者たちの攻撃はまだ終わっていない！』

「何！？」

『うおおおおお！！！』

ズバアアアツ！！

『グオアアアアッ!?!』

「頭部に50ダメージ、頭部パーツ、破損、アタックティラノ機能停止」

「ばっ、バカな!?!」

「リーダー機、機能停止!、そこまで!、勝者、獅童かい!」

「よっしやー!?!」

『ふっ・・・!』

こうしてオレたちは初のロボットに勝利した。

「終わったようだな。」

するとジックさんがやってきた。

「ジック・・・!」

「気は済んだか、竜崎。」

「えっ!?!」

オレにはよく状況がよく理解できてなかった。

「二人とも知り合い・・・?」

「ああ、竜崎は僕の友人さ。」

「ええっ！？、じゃ、じゃあどうしてオレに特訓を！？」

「竜崎が君の噂を聞いてね、戦ってみたいなんて言い出すから……」

「余計なことを……」

「でも、こうでもしなきゃ彼はお前に勝つことはできなかった、それともお前は弱い者いじめがしたかったのか？」

「……わかったよ、俺が悪かった。」

「これに懲りたら見境なく他人に口ボトルをふっかけるのはやめてくれよ。」

「……ああ、そうするよ。」

すると竜崎……さんがオレの方に向き直って話かけてきた。

「かい、お前の実力は想像していたよりも高かった、正直驚いたよ、……それにしても気になることがある。」

「研究所襲撃の事ですか？」

オレは竜崎さんが気になることがあると言ったのでそう聞いた。

「ああ、一体誰が何の目的でやったのか……、メダロットたちだけの犯行なのか、それとも裏で誰かが糸をひいているのか……。」

「確かに気になるな・・・、一応僕の方から博士に調査してもらうように伝えておこう。」

「ジックさんは博士と知り合いなんですか？」

「ああ、博士には色々とお世話になっているよ。」

「はあ・・・。」

「今日はもう帰った方がいいんじゃないかい？、ロクシヨウのメンテナンスもした方がいいだろうし。」

「あ、じゃあそうします。」

「・・・何かあたし会話に入っていけてない気がするんだけど。」

「気にすんなよ、早く帰ろうぜ。」

こうして色々あったけど今日は無事に過ぎて行った・・・。

Memory Disc3に続く・・・。

M e m o r y D i s c 2 強敵登場！その名は竜崎！（後書き）

今回は二人ともメダロッチをつけていたのでゲームに近づけて見ました。

戦闘描写など上手く書けているかわりませんが、もっとこうした方がいいなど意見があれば言ってください。

では。

（ノシ

Memory Disc 3 日常と出会い（前書き）

今回は平和な話です。

ロボットは控えめです。

では楽しんでください！

Memory Disc 3 日常と出会い

「…………ああ、暇だな。」

『そつでいざるな。』

昨日は色々あった分、今日が余計に暇に感じた。

「出かけるかな…………。」

暇だったのでとりあえず出かけることにした。

街中

何かをするわけでもなくオレは街をぶらぶらと歩いていた。

すると…………

「…………ん？あいつは確か…………。」

『ヒカルどのだ…………。』

しばらく歩いているとヒカルってやつを見かけた。

とりあえずオレは声をかけることにした。

「おい。」

「え、ああ、かいくん、それにロクシヨウ・・・？」

「こんなところでなにしてんだ？」

「いや、暇だったから少し歩いてたんだ。」

なんだ、オレと同じか・・・。

「だったら誰かとロボトルすればいいんじゃないか、おまえくらい有名なら相手なんていくらでもいるだろ。」

「はは・・・、実はそうもいかないんだ。」

「・・・？」

「少し場所を変えて話そう・・・。」

ヒカルがそう言ったのでオレ達は場所を変えて話すことにした。

「・・・そうか、有名すぎるのも考えものだな。」

オレはヒカルから三年前の事件の事などを聞いた。

「うん、あの事件以来一部の人を除けばオレにたいする反応が変わってしまった気がするから・・・。」

「・・・」

「そう言えばどうしてかいくんはロクシヨウと?」

「ああ、実はな……。」

オレはこの前あつた事をヒカルに話した。

「そうか、そんなことがあつたのか……。」

「まあ、なんで研究所が襲われたのかはわかんないけどな。」

「そう……、それにしても研究所を襲ったメダロットたちは何者なんだろうね?」

『あの狐王丸と言うやつ、ただの野良メダロットにしては強すぎる。』

『

「もしかしたら誰かの命令で動いていたのかも知れないね。」

『まあどんなやつでもオレだったら楽勝だけどな!』

しばらく話しているとヒカルのメダロットであるメタビーも話に加わってきた。

「こら、メタビー!」

「ずいぶん元気がいいんだな、おまえの相棒は……。」

「ははは……。」

「オレもロクシヨウとおまえたちみたいな関係になれるのかな・・・？」

「うん、きっとなれるさ、オレたちみたいな感じではないだろうけど。」

「ああ・・・。」

「・・・それにしてもかいくんとこんな風に話しができるなんて思ってたかったな。」

「・・・えっ？」

その言葉に少し驚いたが理由は大体わかったので話を続けて聞く事にした。

「最初見た時の印象はちょっと恐かったから。」

「はは、やっぱりそうか、でもオレもイセキ以外のやつとこんな風に話したのは久しぶりだ、楽しかったぜ。」

「それはよかったよ、じゃあまた今度。」

「ああ、またな。」

そう言ってオレはヒカルと別れた。

「・・・本当に久しぶりだぜ、あんなにしゃべったのは。」

『よかったでござるな。』

「ああ。」

ドンッ！

「・・・おっと、ごめんよ。」

歩いているといきなり誰かにぶつかられた。

それにしても不自然なぶつかり方だったな。

「うん？、あつ、サイフがねえ！？」

『もしやさっきの男！』

「待ちやがれ！」

オレは急いでさっきの男を追いかけた。

「待ちやがれ！この野郎！！」

「ん、げっ、追いかけて来やがった！」

『まて！！』

「まてと言われて待つやつがいるか！、・・・にしても足の早いガキだぜ。」

「自慢じゃねえが運動神経はいい方なんだよ！」

しばらく走っているとスリの目の前に人が立っていた。

「どけ！」

「・・・ふんっ！」

するとその人はスリを突然投げ飛ばした。

「うわあ！」

ドンッ！

「なっ、なんなんだ、てめえは！？」

「僕か？、僕はセレクト隊隊長、竜崎正義だ。」

「せ、セレクト隊！？、あのロボロボ団と繋がってやがった？」

「それは三年前の話だ、それにしても君はなにをしたんだ、あの少年に追いかけられていたようだ？」

「うっ、そ、それは・・・。」

「そいつオレのサイフスリやがったんだ！」

「そうか、なるほど・・・ならば捕まえなければいけないな。」

「ぐつ、クソおつ、こうなったらロボットだ！」

「僕とロボットか、いいだろう！」

「タンクソルジャー転送！」

「こい！、バオリキシー転送！」

「なんだ、あのメダロット！？」

オレはセレクト隊の人が出したまるで恐竜の化石のようなメダロットに驚いた。

「なんだあ、そのゴツいだけの骨野郎はやる気あんのか？」

『・・・・・・・・』

「覚悟はいいか、ロボットファイトだ！」

「ハチの巣にしちまえ、タンクソルジャー！！！」

『了解！』

ズドドッ！

タンクソルジャーの弾丸がバオリキシーに向かって飛んでいく。

「避ける、バオリキシー。」

『・・・・・・・・』

ドン、ドン、ドンッ！

バオリキシーはタンクソルジャーの弾丸をすべて回避した。

「す、少しはやるようだな！」

「終わらせる、バオリキシー、アングデコレトで叩き潰せ。」

『…………』

その瞬間バオリキシーはタンクソルジャーの目の前に瞬時に移動し左腕を降り下ろした。

グシャッ！

「頭部に70ダメージ、頭部パーツ破壊、タンクソルジャー機能停止」

「う、うわあ、そんな！」

「すげえ、一撃で倒しちゃった！」

「さあ、来てもらおうか。」

「クソ、こうなったら逃げるが勝ちだ！」

「あ、までよ！」

スリは逃げようとしたがその先には……

「逃がさないであります！」

「クソ、ならこっちに・・・！」

「通さないであります！」

男はすでに囲まれていた。

「ご苦労様であります、隊長。」

「ああ。」

「・・・あの、オレのサイフ。」

「ああ、そうだったね、おい！」

「わ、わかったよ！返しゃいいんだろう！」

男はサイフを取り出しオレに向かって放り投げた。

「あー、よかった・・・。」

「じゃあ僕はこれで・・・。」

「あの、待ってくれ！」

オレは気になった事があったので隊長さんを引き止めた。

「なんだい？」

「たしかあんた竜崎って……。」

「……？、ああ、もしかして君も弟に？」

「弟って竜崎蓮次の事か？」

「ああ、やっぱり君も弟にロボトルをいどまれたんだね、大丈夫だったかい？」

「いや、別に勝てたし、ロボトルが終わってみれば案外いいやつだったし。」

「驚いたな、蓮次に勝つなんて……、すごいんだな君は。」

「いや、そんな……、ロクショウがいてくれたからです。」

正義さんはすごいと言ってくれたがオレだけの力で勝ったんじゃない、ロクショウがいてくれたからだ。

「そう言えばあいつ、なんかセレクト隊がロボロボ団とどうとかって……。」

「ああ……、三年前に魔の十日間と言う事件があったのは知っているね？」

「はい。」

「その事件の主犯がセレクト隊の前の隊長でね……、それと同時にロボロボ団の首領でもあったんだ。」

「はあ・・・。」

「それ以来セレクト隊は信用を失ってね・・・。」

「そうだったんだ・・・、すいません変な事聞いちゃって。」

「いいんだ、事実は事実だからね、それに僕には自分の正義がある、僕にとってはみんなが平和に暮らしていければ自分がどう思われても構わないんだ。」

オレが謝ると正義さんはそう言った。

・・・すごいな、この人、自分たちがどう思われていてもみんなの事を思えるなんて。

「正義さん、オレはみんなからセレクト隊が信用されていなくても、正義のことは信用します！、だってみんなのことを考える人が悪い人の訳がないから！」

「・・・ありがとう、君の名前は？」

「獅童かいです。」

「そうか、君のような少年達のためにも頑張らなければ・・・。」

「あ、もうこんな時間だ！、じゃあオレはこれで。」

『・・・優しい心を持った少年ですね。』

「ああ、彼のような子供の達のためにもオレたちが正しくあらねばな。」

『・・・ええ。』

かいの家

「ただいま。」

『ただいまもどった。』

「おかえりなさい、かいゴハンできてるわよ。」

「母さん。」

「ロクシヨウちゃんもおかえりなさい。」

『う、うむ。』

「さあ、かいはやくあがりなさい。」

「うん。」

オレは母さんに言われて家に上がり御飯をたべた。

そしてやることも無いのもう寝ることにした。

お休みなさい・・・。

ロクシヨウside

かいどのは寝てしまわれたが拙者は少し考え事をしたい気分だったのでもう少し起きている事にした。

『うむ・・・。』

「ねえ、ロクシヨウちゃん、ちょっといい？」

『・・・？、かまわないでござるよ。』

母上殿に声をかけてきてそう言ったので拙者がまわないと答えた。

「・・・ねえロクシヨウちゃん、今かいはどんな感じ？」

母上殿はかいどの事を聞いてきた。

『特にこれと言って変わった事はないでござる。』

「そう、あなたは？」

今度は拙者の事を聞かれたので拙者はこう答えた。

『拙者も大丈夫でござる。』

「そう・・・かいの事、よろしくね。」

『うむ、わかった。』

「あなたも気をつけてね。」

『う、うむ。』

かいどのことをたのむか・・・、母上殿はかい殿のことを本当に
思ってらっしゃるのだな。

拙者もそろそろ休むとするか・・・

『お休み・・・。』

「機能休止します、お休みなさい」

Memory Disc 4 続く・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5842y/>

メダロット+

2011年11月23日19時52分発行